

コ
ハ
ニ
ヨ

遠藤周作



講談社

どっこいश्य

昭和四二年八月一六日 第一刷発行
昭和四二年九月二四日 第二刷発行

著 者 遠藤周作

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一

電話 東京(942) 一一一一(大代表)

振替 東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社国宝社

定 価 四九〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

© 遠藤周作 昭和四二年

目次

ある晴れた日に………	一〇
蟻の穴………	一〇九
再会………	七
かぐや姫………	八
生きる………	六
追求………	五
冒険………	六
ある計画………	三
まがり道………	二〇
プロローグ………	七

緑		一三四
国家というもの		一四四
対面		一六〇
回想		一七一
父と子		一八六
女		二〇一
廉二の日記		二二二
斜面		二三九
火		二四三
若者		三五三

その夜のうちに……………	二六三
決意……………	二七九
世間はキビしい……………	二九七
どこへ……………	三〇六
ちりぬるを……………	三二四
オビンズルの日記……………	三三六
家庭……………	三五二
出発と到着……………	三六三

ど
っ
こ
い
し
ヨ

プロローグ

こんばんは。拙者が作者です。

あなた、どういう恰好でこの夕刊を開けておられますか。食卓にひじをつき、アクビをしながら読んでおられますか。ねそべったまま、テレビをつけっぱなしで眼を通していられるのですか。

一面には今夜もベトナムの状況がのっていますか。大田さんの都知事出馬の記事は掲載されていますか。三面にはまた交通事故や火事の話か。

(イヤになっちゃうね。こうも暗い話ばかりでは……)

プロ野球のテレビ中継までにはまだ一寸時間がある。暇つぶしに夕刊小説でも読んでやるか。

有難う。そうこなくちゃあ、いけん。あなた、いい人だ。

だが拙者、そちら様のお名前を知らない。お年もわから

ん。職業も見ぬくことはできん。

だが、あなたが普通の勤人や主婦でいられるなら、その毎日を大体ながら思い浮かべることができる。

大変ですなあ。毎朝、ねむいのを我慢して、食事もそこそこに家を飛び出し、働きにいくのは。でも、出がけに牛乳を飲むのを欠かさんほうがいいですな。牛乳にはあらゆるカロリーが入っているとドクトル・ヒエコさんが言ったりれる。

駅やバス・ストップまで駆けていく。あッ。今朝もまたあなたはスポーツ新聞を買ったよ。なぜ、毎朝スポーツ新聞を買うのかね。昨日の試合の結果はもう知っているでしょう。ごひいきチームが勝った日には、その試合経過を幾度も幾度も読んでニタリと笑うのは止したほうがいい。あのニタリはあんまり見っともいもんじゃない。

バスがこみあっていますな。でも国電のすさまじさにくらべれば、行列を作ってもどうやらのれるのは倅せかもしれない。

そうグイグイ押さないでもらいたいね。奥につめろって言ったって、もう、つめようがないんだから。なぜ押すの。この娘。ひとをへんな眼でにらみつけるのはよしてもらいたい。バスの男性乗客すべてがチカンじゃないんだ。

から。ゴカイしないで頂きたいの。

右の人、あなたの鞆がぼくの膝にあたって痛いな。その鞆はもちあげてくれませんか。

「失礼……」とあなたはその中年男に礼儀正しく言う。

「まことに失礼であります……そのお鞆、もう少し……何とか……なりませんでしょうか」

聞えないふりをしているよ。この人。

中年男というのは、だからイヤだな。

「ねえ。その鞆、もう少し、上にあげてくださいよ」

まだ知らんふりをしている。小心な顔のくせに意外とアツカマ氏だな。この戦中派は。ぼくを年下だと思つて馬鹿にしておるのか。

たんに早く生れたという事実だけのために、威張るといふ権利はないぞ。あなたはぼくの課長でも上役でもないんだ。上役でない以上、ぼくは、この男に敬語を使う必要をみとめん。

「鞆を、どけろ」

周りの者がびっくりしてあなたの顔をみる。その中年男もやっとあなたの怒りに気がつき、気の弱そうな間の悪い眼をする。

あなたはすっかり照れてしまう。

まア、そう彼のことを怒らんで下さい。なにしろ彼はこの小説の主人公なんだから。それに、彼は片耳がきこえないんです。片耳が。

あなたが怒鳴つたその中年男は――。

可哀想にあなたが渋谷で下車したあとも、乗客の視線を避けるように窓をじっと見つめていましたよ。

気が弱いんだな。この戦中派。

恰好だつてあんまり良くない。洋服もあなたのように颯爽としてズボンの細いやつじゃあないし、ネクタイだって地味なもんだ。

洋服だけではなく顔も随分、くたびれています。時々、眼をしばたたきながら、問題の鞆をわきにかかえ、窓外を眺めている姿は、どうも魅力あるもんじゃあない。新聞小説の主人公として、こんな疲れたような男をえらぶのは損じゃないのか。損じゃあ。

しかし書きたいんだな。作者が。こういう男を。好きなんだから仕方がない。

「すみません、あけて下さい。あけて」

赤坂で、小声で周りの者に告げながら、彼がバスの扉に近づこうとすると

「押さないで頂戴」若いB・Gがキッと睨んで「あたしもおりるんですから」

広場でやっと降車して、この男は少し背をかめながら一ツ木町の方向に歩きだす。

一ツ木町の裏に山陽ビルというビルディングのあるの知っていますか。そうそう。T・B・S放送局の倉庫みたいなのが並んでいるでしょう。あのすぐ近く。

あそこを歩きながら、彼は鞆のなかから補聴器をとり出して耳につける。

（悪いことをしたな、あの青年に）

向坂善作が右耳の聴力を失ってからもう二十三年になる。だから彼は悪気がないのに時々、人から誤解された。

右のほうから誰かに話しかけられても、さっきのようにトボンとした顔をせねばならぬ。

この聴力を失った思い出は彼には哀しい。

戦争中、彼は兵隊だったが、上官からひどく叱責されて、顔を揉まれたのである。以来、彼の右の耳は、聞えなくなり。

「おはようございます」

ビルの入口から二人の女の子が出てきて善作に声をかけたが、この時も彼はトボンとした顔をしていた。

「変な人」

彼が入口にはいると、一人の女の子が友だちに言った。

「こっちが挨拶しているのに。あの人、二階の事務所にくる人でしょ」

「片耳がツンボなんですって、仕方ないわよ」

もう一人の女の子は首をふって善作のために弁解したが「あたし、嫌いだな」相手は若い娘の手きびしきで「あんな中年の人。戦中派っていう世代」

「どうして」

「なんだか、芯の芯までくたびれたような顔しているじゃない。魅力ないわ」

「一時、ロマンスグレーなんてはやったけど」

「ちがうわ。それはもっと年上のおじさま族よ。あの人なんか、それより以下の年輩でしょ。若さもないし、地位もまだできてないから、駄目」

「戦争で、精も魂も使い果たしたのよ」

善作はビルの階段をゆっくり登った。窓からさしこむ光に彼は眼をしばたいた。

まがり道

だが善作がどうして右の聴力を失ったかを説明するためには、フィルムを二十三年前まで戻さねばならぬ。

昭和十九年の二月――

空は古綿をつめたように曇り、東京の街は表通りの店もほとんど戸をとじ、爆風を防ぐ紙だけがよごれたショウウィンドオにはりつけられていた。くたびれた国民服やモンペをはいた市民たちは肩に袋をぶらさげ、時々、その中から出した大豆をかじりながら足を曳きずるようになって歩いていく、みんな黙ってはいるが、しかし戦局が次第に思わしくないことを薄々は感じはじめたあの年である。

善作は大野と肩をならべながら信濃町の改札口を出た。二人は同じ大学の学生であるだけではなく下宿も一緒だった。

「ひもじなア。ああ、ひもじ」

足からずれはじめたゲートルを巻きなおし、大野は切ない声で呟いた。

「学生、言うても名のみやで。勤労働員で飛行機づくりと教練ばかり。なんのために授業料、払わならんねん、それにしてもひもじなア。ああ、ひもじ」

駅前の小さな広場に小さなつむじ風が巻きあがり、防火用の筵の屑や紙きれを巻きあげる。

「なあ、善作。お前、アンコロ餅たらふく食うたこと、あったか」

「あった」と善作も足を曳きずりながら、うなずいた。

「あのな」

大野は立ちどまると、急に眼をかがやかし唇をなめた。「思い浮かべてみいや。こう、舌にとろけるようなアンが、やわらかな、やわらかな白餅の間からはみ出てな、口に入れると……こう……」

「よせ。よさんか」

思わず善作は手をふった。大野の言葉を聞いていると、本当に眼ぶたの裏にもう長い間、味わったことのないアンコロ餅がなまなましく、浮かんできたからである。

それはたまらない苦痛だった。半日中、川崎の飛行機工場で立ちずくめの作業をさせられ、昼には弁当箱に半分も

入っていない大豆まじりの飯を噛みしめ、噛みしめ食べる毎日。そんな彼等にはアンコロ餅など、遠い、手に届かぬ世界のたべものだった。

「今夜もカボチャに代用食やろな」

工場でも級友たちはいつも食いものの話と、召集令状の話ばかりをする。学生ならば勉強のこと、本のが話題になっていいと善作は時折、反省もするが、この空腹感には本のことを考えるだけでもイヤだった。

「ああア、俺たちはどうなるんやろ」

「きまつてるじゃないか。赤紙がくる。学校を棄てて入営する」

学徒出陣という名のもとに文科系の学生の徴兵延期が停止されてから間もなかった。神宮外苑で雨の日、東条首相が演説し、善作たち学生は銃を肩にかついで、泥水をはねあげながら行進し……あの日は烈しく雨がふっていた。

「矢田も入営したし、藤村にも赤紙がきたし」

「俺たちにだって、今日でも通知がまいこむかもしれないぞ」

家々の戸口には火たたきや防火用の桶がころがっていた。下宿までの道は人影がほとんどなく、寂莫としていく。

「そんなこと言わんといて」

大野はおどけながら両手をあわせた。

大野がおどければ、おどけるほど、善作にはその心の不安がよくわかる。冗談ではなく、今日でも下宿に区役所から召集令状が舞いこめば、自分たちの運命は、はっきり決まってしまうのだ。兵営から、戦場へ。戦場から――

いや、考えまい。考えたところでどうなるものでもない。

善作は首をふりながら胸のなかに拡がる黒雲のような不安を追ひ払う。

どの家もしんと静まりかえっている。どの商店も店を閉じている。売るものなんか、何一つない。空は曇っているが、街も死んでいる。時々、その灰色の空のなかでバチバチと何かがはじける音がした。

「今夜は、B 29も来んで」

「どうして」

「一昨日、奴等、ビラまいたやろ。あれに来週までお目にかかりませんと書いたそやうで」

敵機の空襲はこのところ、次第に執拗になりはじめていた。彼等は爆弾だけではなく、時折、次の空襲地区を予告するビラまでまいていく。

「じゃあ、グッスリ眠れるぜえ、今夜は」

うしろで何かのきしむ音がした。ふりかえると国民服にゲートルをまいた男が二人の下宿の方向に自転車走らせってくる。

（区役所の係員じゃないだろうか）

追いついた自転車の行先を二人はじっと立ちどまって見つめる。国民服の男は下宿とは反対の右の道にまがっていった。

「ひやっ、とさせよった」

笑いが急に二人の口もとにこみあげてきた。とも角も、どうやら今日一日、区役所から配達される召集令状の悪夢を、まぬがれそうだった。

下宿にたどりついて玄関をあけると、若い娘が小声で唄を口ずさんでいる声がかすかにきこえた。あれは善作たちを厄介になっているこの下宿の娘、芳子の声である。

「よっちゃん」

大野は奥にむかって

「よっちゃん、ただいま」

おかえんなさいという返事が遠くからそっと戻ってきて

「お婆さんは」

「配給物をとりにいっているの」

階段をギシギシいわずながら二階にのぼる。六畳の二人の部屋には机が二つ。本箱が一つ。それから古ぼけたポーターブルの蓄音器が一つ。大野は柄に似合わず音楽が好きなのだった。

「向坂さん」

階段の下から芳子の声がきこえて

「お芋、たべる？」

「有難いね」善作はゲートルを足からとりながら「ペコペコなんだ」

「でも三つしかないのよ」

「三つあれば、オンの字だよ」

「俺にはくれへんの。よっちゃん。向坂ばかりに、やさしくして、ひがむでえ」

「いやな大野さん」

皿の上に薩摩芋の切ったのを三つのせて、芳子は二階にあがってくる。モンベに泥が少しついている。

「ねえ、大野さん。何か本かしてくれない」

大野が嬉しそうに本箱から本をとりだす。

向坂や大野にとって、下宿の娘である芳子の存在は、暗い毎日のかすかな救いであった。

そう……

下宿の娘、芳子の存在は向坂善作にとっても大野にとつても、暗い毎日にホッと一息つかせてくれる救いであつた。

今のように、娘たちが男の子と席をならべ、大学の講義を受けられる時代ではなかった。ダンス・パーティもなければ、一緒に自動車にのつて若い男女が海辺や郊外に遠出をできる時代でもなかった。

だから、工場でのくるしい勤労働員、つかれた体を鞭うつ軍事教練——それだけしかないような毎日に、重い足をひきずつて下宿にかえり、芳子の姿をみると、善作も大野もなにか胸しめつけられるような幸福感を感じるのである。自分たちにもまだ、かすかだが、青春というものが残つていたような気がするのである。

だが、そのくせ——

善作も大野のどちらも、芳子のことが好きだと、口にだしたことはない。たいていのことはつつみかくさず打ち明けてあつてゐる二人だったが、

「俺、実は彼女が好きなんだ」

と相手にむかつて宣言したことはない。

それはあの時代の学生に共通した羞恥心のためでもあつたが、それよりも相手が自分と同じように芳子に何を感じ

ているか、痛いほどわかつていたからである。暗黙のうちに二人の間には芳子が好きだと言う言葉の口に出さぬ約束ができあがつていたのである。それは善作にとっても大野にとつても、せつないタブーだった。

つめたくなつた芋をかじりながら、善作は大野がその芳子のために詩を読んでやるのを聞いていた。

私はあの日に信じていた 粗い草の上に 身を投げすててあてもなく 眼をそそぎ

秋を空にしずかに迎えるのだと 秋はすすきの風に白く光つてと

「だれの歌なの、それ」

芳子は髪に手をあてながら顔をあげた。眼が光つていた。

「だれでもええ。だまって、お終いまできけや」

「ええ」

どうして生きながらえていられるのだろうか

死ぬのが ただ 私にはやさしく怖いからにすぎない
美しい空 美しい海 だれがそれを見たいものか

捨てて来たあの日々と 愛していたものたちを

私は憎むことを学ばねばならぬ

善作はなぜ大野がこの詩を芳子のために読んでいるのか、わかるような気がした。大野は芳子のためだけではなく善作のため、大野自身のためにも読んでいるのだった。

まもなく自分たちは出征する。戦争に行く。そして美しい空、美しい海、美しい娘たちの、もう、いない苛酷な世界につれ去られる。捨てて来たあの日々と愛していたものたちを憎まねばならぬのだ。

夕暮だった。部屋の中も窓の外も灰色で、あまりに静かだった。ごめん下さいと玄関でだれかの声がかすかに聞えた。

「もう一度、読んで。大野さん」

芳子はその声に気がつかなかったらしく、眼を少しうるませながら大野の顔をみた。

「もう一度かア。えらく気に入ったな」

「あんまりキレイなんですもの。その歌」

「ああ、ああ、読んでやるさかい。芋をこっちによこせえ」

芋を頬張りながら、大野は膝の上の本をみた。次に彼が

読んだのは別の詩だった。

かなしみではなかった日の

ながれる雲の下に

ぼくはあなたの口にする言葉をおぼえた

「ごめん下さい。お留守ですか」

今度ははっきり玄関で、声がかこえた。不安そうに大野は本から顔をあげ善作の顔をみつめた。

「芳ちゃん、おりてみろや」

「だれかしら」芳子は不満そうに「折角のところなのに」うなずいてモンペを一寸、なおし、芳子はたちあがった。彼女の足音がギイギイと階段をきしませながら消えていった。

「だれやろ」

「知らん」

二人の胸にはある不吉な予感が急にうずきはじめた。不安が水にたらししたインキの滴のように拡がりだした。

玄関で芳子とどれかとは話しあっているが、その声は低くて二階では聞きとれぬ。

「じゃあ、後ほど……」